

「書評」アジア・太平洋戦争終結七〇周年夏の福岡良明の編著

―福岡良明 著『「戦跡」の戦後史 せめぎあう遺構とモニュメント』他二冊―

木下浩一

一 はじめに

二〇一五年はアジア・太平洋戦争終結七〇周年であり、一般書は勿論のこと専門書においても関連図書の出版が相次いだ。本稿における書評の対象である三冊もアジア・太平洋戦争をテーマにしている。三冊とは、

『「聖戦」の残像―知とメディアの歴史社会学』（人文書院、二〇一五年）、『「戦跡」の戦後史 せめぎあう遺構とモニュメント』（岩波書店、二〇一五年）、『「知覧」の誕生―特攻の記憶はいかに創られてきたのか』（柏書房、二〇一五年）であり（以下、適宜『聖

戦』『戦跡』『知覧』と略記）、ともに福岡良明が著者あるいは編者である。

三冊は同時期（二〇一五年六月～八月）に出版されている。出版時期が重なったのは、冒頭で述べた戦後七〇周年とも関連しているように、編著者の福岡良明が、これまで一貫してその問題関心をアジア・太平洋戦争においてきたことが大きい。しかし福岡自身は『聖戦』の「あとがき」で、「もともととは、国民国家形成への関心から研究をスタート」し、戦争体験やメディアを研究対象とするようになったのは後のことであると述べている⁽¹⁾。

限られた字数のなかで三冊を対象とすることは、散

漫さを招く可能性もある。しかし本稿の主眼は、特定の書籍を評するということにはない。三冊を中心に、福岡良明という研究者の「現在」を見ることにある。そのことによって、歴史社会学周辺におけるアジア・太平洋戦争の記憶研究の「現在」を批判的に把握できればと考える。

まずは、対象の三冊を簡単に紹介する。

『聖戦』『戦跡』『知覧』は、順に総論から各論へとテーマが絞りこまれていく。『聖戦』においては広く「アジア・太平洋戦争」がテーマとなっているが、『戦跡』ではメディアとしての「戦跡」に分析対象が限定されている。そして『知覧』では、戦跡のなかでも特に「知覧」という個別事例に絞りこまれる。

『聖戦』は、二〇〇五年から二〇一三年に福岡が執筆した論文を集めた論文集である。やはりアジア・太平洋戦争をテーマにしつつも、サブタイトルに「知とメディア」とあるように、アジア・太平洋戦争の記憶の形成における「教養・教育」と「メディア」の関係

を明らかにしている。

一方『戦跡』は、メディアとしての「戦跡」をめぐるポリティクスを詳らかにしている。同書は書きおろしであるが、福岡が、自身のこれまでの個別の事例研究を整理しつつ再度論考を加えている。『聖戦』はテキスト分析を中心とした比較メディア論であったが、『戦跡』は、より広く史料収集し分析を行った社会史研究といえるだろう。

『知覧』は、十人の研究者の論文集であり、福岡は山口誠とともに編著者を務めている。既述の通り『戦跡』を総論とするならば、『知覧』は各論といえる。いまや特攻の代名詞ともなった「知覧」がどのように発見され、また「知覧」という記憶がどのように形成されてきた(いる)のかを明らかにしようとしている。現在進行形で進みつつあるアクチュアルな問題関心である。

これら三冊は社会史研究の流れの中にあり、それぞれ程度は異なるものの、広い意味ではアジア・太平洋

戦争に関する「記憶の研究」といえるだろう。メディアについてのウェイトはそれぞれ異なるものの、メディア史研究でもある。

内容の要約に入る前に、研究者・福間良明の略歴を紹介する。

『聖戦』の経歴によれば、福間良明の専門（専攻）は、歴史社会学あるいはメディア史となっている。出版社勤務を経て、現在は立命館大学産業社会学部教授を務めている。最初の単著は、『辺境に映る日本——ナショナリティの融解と再構築』（柏書房、二〇〇三年）であるが、国立国会図書館サーチで検索すると、単著・編著・共著・翻訳含め三十五冊がヒットする（二〇一五年一二月末時点）。研究者としてのスタートをいつとするかは難しいが、最初の単著から十五年経過していないことを考えれば、非常に多産だといっていだろう。

福間の当初の研究は、すでに述べたように「国民国家形成への関心」にあったが、その後、分析対象を映

画やマンガあるいは雑誌などのメディアやコンテンツに拡げている。しかしその問題関心は、常にアジア・太平洋戦争にある。右記の映画やマンガなどのコンテンツは、ほとんどがアジア・太平洋戦争関連のものであり、福間は一貫して「アジア・太平洋戦争とは何だったのか」を問い続けているメディア史家である。近年の福間は山口誠らとともに、「戦跡」をメディアとして捉えることで分析の幅をさらに拡げている。当初から記憶研究の要素を含んでいたものの、分析対象の拡大につれ、福間の仕事はより「記憶研究」へと移行しているようでもある。

その福間が学会役員を務める戦争社会学会は、二〇〇九年五月に発足した新しい組織であるが、二〇一三年にはその成果として、福間良明・野上元・蘭信三・石原俊編『戦争社会学の構想——制度・体験・メディア』（勉誠出版、以下『戦争社会学の構想』と略記）を出版している。福間らの構想する「戦争社会学」は、分析対象を「戦争」に限定し、歴史学や社会学の知見を

渉猟しつつ独自の手法を加え、「戦争社会学」をディシプリンとして立ち上げようと企図するものである。福岡らのアジア・太平洋戦争に対する強い問題意識の表れといえるだろう。

二 内容の要約

前節で福岡の経歴を紹介したが、以下では三冊の内容をそれぞれ要約する。

(一)『『聖戦』の残像―知とメディアの歴史社会学』すでに述べたように、『聖戦』は、福岡個人のここ一〇年の論文を集めたものである。「聖戦」とは勿論、アジア・太平洋戦争を指す。本書はプロローグと三部から構成される。第一部「ポピュラー文化のなかの戦争」はマンガ・映画・雑誌などのコンテンツに、第二部「焦土の思想とメディア」は広島や沖縄という場所や空間に、第三部「知・戦時博覧会・ナショナリティ」

は教育・教養などに、それぞれウェイトがある。

プロローグ

プロローグでは、アジア・太平洋戦争に関する歴史学・社会学・メディア史研究関連の先行研究のレビューを行っている。『戦争社会学の構想』で網羅した内容をまとめたものともいえるが、コンパクトながらも密度の高い内容となっており、アジア・太平洋戦争に興味関心のある初学者は一読すべきであろう。

ポイントは多いが、ここでは「比較メディア論」と「戦争体験記」をあげる。前者は、ひとつのメディアをただで語るのではなく、複数のメディアを比較することによってメディアの「形式」「特性」「効果」の違いを明らかにしようとするものである⁽²⁾。

後者の「戦争体験記」は、福岡が近年興味関心を強くしている分析対象のひとつである。プロローグでも相当な字数を割いて言及している⁽³⁾。背景のひとつに、戦争体験などの言説の増加があげられる。戦争経験者が残りの人生を意識する時、何かを語り残したり、あ

るいは書き残したいとの思いが強くなる場合が少なくない。しかし先行研究によれば、その言説分析には注意が必要であるという。時には生々しさや凄味が薄れたり、あるいは世代の違いによって語りにズレが生じたりすることがあるというのだ⁽⁴⁾。一方で遺族会が、戦争体験者の吐露にブレーキをかける「証言抑制機能」を有する場合もあるとしている⁽⁵⁾。

第Ⅰ部

第1章「『はだしのゲン』のメディア史」の初出は二〇〇六年であり、福間の初期の論文である。福間は、その言説分析の精度を年々高めているが、第1章の論文においては、メディア言説をシンプルかつ有効に使用している。

第1章で扱っているテキストは『はだしのゲン』である。『はだしのゲン』は、過去にクロスメディア展開しているが、同一のコンテンツではあっても、それが載るメディアが異なれば効果も異なる。「マンガ雑誌」「コミック」「映画」など、メディアの形式によ

るコンテンツの変化、あるいはオーディエンス受容の変化を明らかにするとともに、福間は、それらを媒介変数に用いて集団文化の変容をも明らかにしている。

第3章「『軍神・山本五十六』の変容―映画『太平洋の鷲』から雑誌『プレジデント』まで」は、海軍あるいは山本五十六のイメージの変容を追っている。海軍と山本は時に理想化されるが、それぞれのイメージは、海軍は「スマートで合理主義的」、山本は「平和主義者」「早期和平論者」である。イメージの変容過程においては、送り手（作り手）とオーディエンスとの共犯的関係も見られたというが、福間は多くの言説を参照し慎重かつ丁寧に記述している。また、言説分析においてはアジェンダとフレーミングを明確に区別し、受容分析においては世代などによってセグメント化するなど詳細に分析している。

第Ⅱ部

第Ⅱ部では広島や沖縄などの場所や空間を扱っているが、その空間におけるメディアは「博覧会」や「メ

ディア・イベント」である。

第4章「戦後初期の「八・六」イベントと広島復興大博覧会―「被爆の明るさ」のゆくえ」によると、被爆都市・広島が「八・六」をイベント化するなかで、当初のイベントは「祝祭的な」明るさを有していたという。原子力の平和利用、あるいは同じ被爆都市・長崎との競合関係によって、徐々に広島の「明るさ」は変容していったが、それにもかかわらず広島の「明るさ」はその後失われず、連続性が見て取れるという。

「日琉同祖論」を論じた第6章「日琉同祖論の変容と沖縄アイデンティティ」「同祖」のなかの「抵抗」も興味深い。日琉同祖論は元来、日本人側が発した論であったが、その論を沖縄（琉球）側がアジェンダとする時には、フレーミングに「ある種のアンビバレンスが存在する」という。そのアンビバレンスとは、日本（薩摩）支配とアメリカ支配の間で揺れ動く「沖縄のアイデンティティ」であり、それらの学問的止揚（妥

協）を目指したのが、伊波普猷によって創始された沖縄学であった。福岡は沖縄学の系譜を辿りつつ、沖縄がその困難な状況やアメリカ支配から脱する為に「本土」へのナショナリズムが動員される様を描き出している。

第Ⅲ部

第Ⅲ部においては、「博覧会」や日本民族学の系譜、あるいは英語学や通信教育など、メディアと教育・教養の関係を明らかにしている。

第9章の「民族知の制度化―日本民族学会の成立と変容」では、戦争協力から多くの批判を浴びた民族学について、主に民族学協会・日本民族学会という二つの組織に注目することで、戦前・戦中・戦後を貫戦史的に叙述している。福岡は断続と連続の双方を明らかにしているが、本章においてより重要なのは戦後への連続であろう。

(二)『戦跡』の戦後史 せめぎあう遺構とモニユメ

ント』

本書のプロローグにおいて福間は、『戦跡』執筆時の関心を次のように述べている。

本書の関心は往時の糾問ではなく、「なぜ、そのような見方が生じたのか」「その社会的要因は何だったのか」を考えることにある。それぞれの時代においては、今日とは異なる「正しさ」や「自明さ」が紡がれてきた。だとすれば、なぜ、そのような「正しさ」「自明さ」が創られたのかを問わなければ、そうした認識を支えている磁場を析出することは難しい⁽⁶⁾。

福間は「戦跡をメディアとして捉える」ことで問いの答えに迫ろうとしているが、それが本書の最大の特徴となっている。

したがって「戦跡」が重要なキーワードとなるわけであるが、その「戦跡」の定義は、本書にはない。一

方で、サブタイトルにある「遺構」と「モニュメント」について、それぞれ福間は次のような定義を行っている。

遺構とは、戦災やそれに伴う人の死があつた建造物等の「現物」を通して、戦争の痕跡を具体的に可視化させるものを指す。(中略)それに対し、モニュメントは、こうした「現物」とは異なり、戦後新たに創られた記念碑等で、過去の記憶を抽象的にシンボリックに指し示すものである⁽⁷⁾。

(強調筆者)

遺構やモニュメントと戦跡との包含関係などは不明であるが、これについては後に論考を加える。

『戦跡』におけるテーマは、「広島」「沖縄」「特攻」の三つである。アジア・太平洋戦争を研究対象とする限りにおいては、「広島」「沖縄」「特攻」は避

けて通れない。当然、先行研究が膨大に存在することになるが、だとすると新たな知見を付加するのは難しい。しかし福岡は「戦跡」というメディアに着目することで、「広島」「沖縄」「特攻」それぞれについて新たな記憶のポリティクスを明らかにしている。『聖戦』は個別の事例研究が多かったが、『戦跡』においてはそれらの事例を統合し直すような記述も見られる。

第1章 「遺構への嫌悪」の忘却

第1章では、被爆都市・広島における「遺構」と「モニュメント」が、分析・論考の対象となっている。当初、戦跡として「横綱」の地位にあったのは、原爆供養塔であった。その原爆慰霊塔が「陥落」し、平和記念公園や原爆ドームが前景化してくる。そのポリティクスにおいては、戦後復興を指すなかで原子力や慰霊の「平和利用」が叫ばれるようになり、そこには地元・広島政治家や新聞社、あるいは中央の知識人や著名人の関与があったという。

第2章 「モニュメントの抱擁と憎悪」

沖縄本島の摩文仁丘には、日本全国の各府県の慰霊塔が林立しているという。しかし、それらの合祀者のうち、沖縄戦の戦没者は六パーセントにも満たないという⁽⁸⁾。なぜ、それほど多くの沖縄戦以外の戦死者が合祀されたのか、その過程を福岡は詳らかにしている。福岡によれば、映画『ひめゆりの塔』の受容には「郷愁に近い感傷」があり、またそこで強調されるのは「純真さ」であったという⁽⁹⁾。その背後には、日本人の「加害性の否定」が見え隠れし、さらには「沖縄の日本復帰への希求があった」という⁽¹⁰⁾。また「日本復帰」も当初から希求されていたものではなく、中華人民共和国の成立や、朝鮮戦争の勃発を背景にした米軍による基地建设の本格化、あるいは本土との経済格差などがあつた⁽¹¹⁾。

一九五〇年代までの沖縄は本土からの渡航が難しく観光に不向きであったが⁽¹²⁾、一九六〇年代に入ると一転して観光業が伸長するようになったという⁽¹³⁾。この流れにより、遺族団による戦跡巡礼が増加し、それに

つれて慰霊塔建立が続いた。林立する各府県の慰霊塔では「戦没者数の誇示」までがなされていたという⁽¹⁴⁾。

その過程で沖縄戦以外の戦没者も包含されるようになっていったが、それは沖縄戦以外の戦没者の遺族にとっても「共感されるものであった」という⁽¹⁵⁾。また、

その過程で重要な機能を果たしたメディアが「バスガイド」であったことを、福岡は明らかにしている。

第3章「逆輸入される『記憶』——知覧・特攻戦跡」

第3章は、後述の『「知覧」の誕生』と重複するため、ここでは言及しない。

終章「モニュメントの抱擁と憎悪」

終章では、第1章から第3章までを比較・統合して論考を行っている。まず、そこで強調されるのは「モニュメントの前景化」である。広島・沖縄・知覧ともに、それぞれの「創られる」プロセスにおいてはモニュメントが大きく前景化し、特に知覧においてはその傾向が顕著であり、遺構が顧みられることはほとんどなかったという⁽¹⁶⁾。さらに、広島・沖縄においては「遺

構のモニュメント化」も見られたという⁽¹⁷⁾。

モニュメント化の過程では、戦跡の固有性が消失し、包括性の獲得が見られた⁽¹⁸⁾。また、戦跡の整備の過程では「美化」が見られ、美化によって「排除」される人たちも存在したという⁽¹⁹⁾。

終章でもっとも重要なのは、福岡自身による「戦跡というメディア」への言及部分であろう。「戦跡というメディア」には、「（特攻の美化と否定という）同床異夢が成立するところに、議論の並存を許容する」（註釈筆者）特性があることを、福岡は示唆している⁽²⁰⁾。

また、戦争にまつわる議論が必ずといっていいほど陥る「二項対立」を抜け出す糸口として、安田武と橋川文三の議論を、福岡は再評価している⁽²¹⁾。

（三）『「知覧」の誕生——特攻の記憶はいかに創られてきたのか』

単なる地名ではないカギ括弧付きの「知覧」には、

近年の戦争・戦記ブームを追い風に、構築された記憶であることが含意されている。

福間は「知覧」がどのように誕生し、そして日本人に膾炙していったのか、また「知覧」に代表される特攻の記憶が、あらゆる水準でどのように形成されてきた（いる）のかを明らかにしている。

『聖戦』『戦跡』は福間の著書であったが、『知覧』は編書となる。本稿の目的は、既述のように「福間の仕事の現在」を見ることにするため、『知覧』については論点ごとに要約することとする。

直接の体験者ではない人間の媒介性

間メディア的相互作用のなかでキーパーソンが前景化あるいは後景化していく様を、福間らは明らかにしている。

具体的キーパーソンは、高木俊朗（戦争末期に、軍の報道班員として知覧で特攻を取材）・板津忠正（特攻の生き残りで、後に語り部）と鳥濱トメである。

食堂の経営者であった鳥濱トメは、特攻隊員ではなかったにも係わらず「知覧」のシンボルであり続けた。

それに対し高木は、より特攻隊員に近い報道班員であつたにも係わらずシンボルではなくなっていた。それは高木自身が、知覧町と袂を分かつたためでもあつたが、むしろ様々な主体が関与するポリテクスの中で、後景化していったという⁽²⁾。

重要なのは、「直接の体験」が分岐の要因とならなかった点であつた。多くの主体が「知覧」をプロモートする際に、高木よりもトメの方が有用であつたのだ。

もう一点重要なのは、高木が「知覧」において問題視した観点である。それは特攻の意味であつたという。つまりは特攻という行為に戦術上の意味があつたのか、それともなかったのかということだ。高木は「特攻は無駄な死であつた」という点を最重要視し、その点をこそ後世に伝える必要があると考えていた⁽²⁾。高木は様々なポリテクスのなかで徐々に後景化してい

くが、その後景化の要因のひとつが「特攻の美化」を非とする点にあった。

「特攻の美化」は、その他の章においても大きな論点となっている。遺族・政府・自治体・企業・観光客・朝鮮人など、それぞれの主体によって受け止め方が二分されたという。

真正性・固有性の獲得と創出

鳥濱トメの前景化には真正性の獲得が必要であったが、記憶の形成において「真正性」や「固有性」（の獲得）が重要な要素であることを『知覧』は明らかにしている。

本書における真正性の定義は、「見たものが「本物らしい」と感じ取れるもの」⁽²⁴⁾であるが、「知覧」における真正性の獲得の際に利用されたのは、メディア・イベントやレプリカであった。例えば、知覧特攻基地は陸軍の基地であったが、知覧特攻平和会館に展示されている特攻機は海軍機であるし⁽²⁵⁾、あるいはホテル

館富屋食堂（トメの経営していた食堂跡。以下、ホテル館と略記）では、レプリカが多数用いられているという⁽²⁶⁾。

真正性や固有性の獲得過程においては、メディアを通じたナショナルな記憶との相互作用も重要な点であった。具体的事例として、二葉百合子「岸壁の母」と菊池章子「基地の母」という歌謡曲があげられている⁽²⁷⁾。

「平和」というマジックワード

「知覧」の成立過程では、（中央）知識人との軋轢が生じていた⁽²⁸⁾。その軋轢の解消において有効に働いたマジックワードは「平和」であったという⁽²⁹⁾。

「平和」というマジックワードによる思考停止は、本章の大きな論点である。「平和」という言葉は耳触りがよく、またほとんどすべての人が首肯するが、その言葉によって多くの、かつ重要な争点が見えなくなっている。

メディアとしての遺書とレプリカの「わかりやすさ」

真正性や固有性の獲得においては「遺書」というメディアが有効に働いたが⁽³⁰⁾、遺書というアジェンダはいくつかの争点を含んでいたという。例えば、様々な強制性のなかで特攻隊員が書いた遺書の内容は、本音なのか、それとも建前なのか。そもそも特攻自体が志願なのか強制なのか。「遺書」は来館者というオーディエンスに高い訴求力を示したが、そこには展示する側と見る側の一種の共犯関係も存在していたという。

また遺書については、「コピー」というレプリカが存在した。知覧特攻平和会館のオルタナティブであるホタル館には、多くの遺書が展示されているが、それらの多くはコピーであるという⁽³¹⁾。しかしコピーであっても、その内容をオーディエンスは「本音(素顔)」と捉え、本物以上の訴求力を持っているという。それらレプリカやコピーが高い訴求力を有していた要因は、「わかりやすさ」だとする⁽³²⁾。

類型化の試論

第十章において井上義和は、「活入れ効果」に着目し論じているが、より重要なのは後半における指摘である。後半で井上は、「先へ進むための手がかりを得るために、事例から活入れの論理構造を抽出してみよう」⁽³³⁾（強調筆者）とした上で、「知覧」における記憶の類型化を試みている。

井上によると「知覧」における記憶は、英霊との「関係の捉え方」によって二つの類型に分けられるという。ひとつは「断絶・対象関係」に着目するタイプ1であり、もうひとつのタイプ2は「連続・継承関係」に着目するものだという⁽³⁴⁾。具体的にいえば、前者は「戦時を思えば今は幸せ」と捉え、後者は「特攻隊員に感謝」するなどである。

戦争体験の継承という場合、一般には「記憶の継承」という枠組みで捉えられる。しかし井上は、戦跡における活入れ効果の事例から、「遺志の継承」というも

う一つの枠組みの存在を指摘する⁽³⁵⁾。井上は、後者がタイプ2へと収斂することを示唆し、どちらの枠組みで議論するかが議論の有効化を図る上で必要であり、またそのためには類型化や枠組みなどが重要であるという。井上の指摘は、「記憶の継承」の後景化を危惧したものである。

三 批判的検討

以上、三冊を概観したが、以下では批判的に三つの論点をあげておきたい。

(一) 用語の定義

当然のことながら三冊には様々な用語が登場する。しかし、それらの定義には曖昧なものが見られる。例えば既述のように、遺構とモニュメントについての定義はあったが、戦跡については見当たらない。あるいは、集合的記憶の定義も曖昧である(集合的記憶につ

いては(二)の類型化において詳述する)。

戦跡の定義については、福岡は、現時点において意識的に回避している可能性もある。あくまで筆者の推測であるが、現時点においては「戦跡＝遺構＋モニュメント」と考えているが、今後、遺構あるいはモニュメント以外の類型が見えてくる可能性もあり、現時点においては戦跡の定義を保留しているのではないか。

しかしながら、学や論には独自の研究対象と研究方法が必要となる。精緻に定義されたターミノロジーは独自の研究方法確立の前提条件であるといえるだろう。「用語の整備」は、福岡らが構想する戦争社会字の立ち上げにも寄与するのではないだろうか。

(二) 類型化の必要性

既に述べたように、井上は「知覧」の活入れ効果の分析において類型化を試みている。

福岡は構築主義的に事例の記述をストイックに行っ

ているが、その類型化は少ない。読者はその記述を、一種のストーリーやナラティブとして理解・記憶する必要があるが、それは容易ではないだろう。多くの読者と知見を共有するには、理論化とまではいわないが、一定度の類型化はあつていいのではないか。

しかしながらその類型化においては、慎重さが求められる。『戦争社会学の構想』で福間とともに編者を務めた野上元は、野上元・小林多寿子編著『歴史と向きあう社会学―資料・表象・経験―』（ミネルヴァ書房、二〇一五年）において、「歴史研究に限ったものではない」との留保をつけた上で、「分析的研究」と「記述的研究」について次のように述べている。

分析的研究とは、集められたデータをもとに、起こった事実を「原因―結果」（因果関係）に整理して「説明」する研究である。そのさいには（広い意味での）「比較」が重要な意味を持つている⁽³⁶⁾。

その上で、「こうした説明の妥当性を確保するために必要なのは、経験的なデータを収集することである」とし、「記述的研究」の必要性に言及している⁽³⁷⁾。さらに、歴史学が固有に持つ困難性については、次のように述べている。

ただ、歴史学のような分野では、分析や説明を試みようとしても、実験のような形でデータの収集を行うことができない。（中略）つまり、因果関係の説明や未来予測ではなく、むしろ社会の記述じたいが、「何をどう書くか」という大きな学問的課題・目標となるのだ⁽³⁸⁾。

今回の三冊を見る限り、福間の仕事はこの野上の論に従っているともいえる。

それでも本稿においては、あえて類型化を試みたい。論考においては、モリス・アルヴァックスの『集合

的記憶』(行路社、一九八九年)における定義・枠組みを援用する。

アルヴァックスは、集合的記憶の形成の前段階として、個人の思考の接合を次のように述べている。

各人が、これら個々人の思考の外部にありそれらを包む一種の人為的環境を、集合的時間と集合的空間を、そして集合的歴史を、創り出すことを認めるであろう。こうした枠の中で個人の思考は接合するのである⁽³⁹⁾。(強調筆者)

ここでアルヴァックスは、集合的記憶を規定する「枠」として、「時間」「空間」「歴史」をあげている。引用部分における言及順(強調部分)は、後に示すように、アルヴァックスのそれらに対する重要度と合致している。つまり、アルヴァックスが集合的記憶において最も重要視するのは「時間」である。それは次の言

葉からも明らかである。

集団の記憶の中で最も大きい位置を占めるのは、その集団を根底から変様することなく過ぎ去った時間である⁽⁴⁰⁾。

アルヴァックスが時間の次に重視するのは「場所」である。「空間的枠の中で展開しないような集合的記憶は存在しない」とし「空間とは持続する現実である」(強調筆者)という⁽⁴¹⁾。「持続」とは時間の継続であるから、「場所」の概念においても「時間」が含意されている。その上で「われわれが注意を向けなければならぬのは、空間へ、われわれの空間へなのである」とアルヴァックスはいう⁽⁴²⁾。時間(性)をも含んだ空間が、時間の次に重要だというのだ。

「歴史」については、どうか。アルヴァックスは「歴史とは変化の場」であるとし、「歴史はその総和(積

分の意味での)を、または終局の結果を、知覚するだけ」だとする⁽⁴³⁾。つまりは、歴史とは積分の過程であり、またある時点においての歴史は、その積分の結果だというのが、歴史において「時間」は変数とはならないが、その軸は時間軸であることから、「歴史」についても「時間」が含意されている。

またアルヴァックスは「歴史」について、「歴史的かつ一般的観念は極めて二次的な役割しか演じないであろう⁽⁴⁴⁾。」「われわれが集合的記憶と呼ぶものの本質をなしているのは、歴史的記憶でもその枠でもないのである⁽⁴⁵⁾。」「とも述べている。これらからアルヴァックスは、集合的記憶においては「歴史」をあまり重要視していないことがわかる。その一方で、集合的記憶と「歴史」との関係を次のように述べている。

枠のない記憶、つまり想い出を分類するのにその社会に特有の言葉と実際の生活から借用された若干の観念しか自由にできない記憶と、他方で

は、記憶のない枠、すなわち個人的記憶において構成されたりあるいは保持されることのない歴史的または集合的枠とを、実際に区別できるであろうか。われわれはそうは思わない⁽⁴⁶⁾。

つまりは、集合的記憶における「歴史」の重要度は低いが、歴史は集合的記憶に様々な型で複層的に影響を与え、また個人的記憶と分化していくため、集合的記憶と個人的記憶は重なり合う部分が大きいという。

また歴史には大別して二つあり、ひとつは「書かれた歴史」であり、もうひとつが時間を通じて永続し更新される「生きている歴史」だとする⁽⁴⁷⁾（強調筆者）。ここでもやはり「時間」が含意されている。アルヴァックスは「時間」を重視することから、「書かれた歴史」よりも「生きている歴史」の方が重要であるといえる。

以上、集合的記憶を下支えする要素を図示すると図

1ようになる。

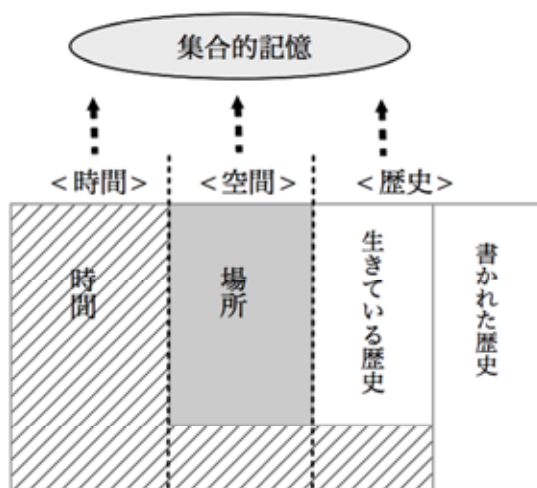


図1. アルヴァックスの集会的記憶の枠組み

図1に示したように、集会的記憶を下文支える要素には、大きくわけて「時間」「空間」「歴史」があり、

後者の二つは「場所」、あるいは「生きている歴史」「書かれた歴史」に細分化される。これらの要素を属性と見れば、任意の組合せによる類型化が可能となるだろう。

また福間は、それぞれの要素の「質」を問うてみる。例えば、同じ「空間」を共有していたとしても、トメが共有していた空間は「死とは比較的遠い」食堂などの生活空間であり、高木らが共有していたのは「死と隣りあわせ」の戦場であった。当然、前者よりも後者の方が、死者との関係は濃密であった。

この「関係の濃淡」という質的差異を導入し、トメらを分類してみる（深い共有…◎、通常の共有…○、浅い共有…△、非共有…×）。類型化に用いる要素は「時間」「空間」「歴史」とするが、「空間」については「過去（戦中）」と「現在」に分け、また「歴史」については「生きた歴史」のみとする（図2）。

関係性の濃いものから ◎ ○ △ ×

シンボルとしての強度 ↑	時間	空間		歴史
		過去	現在	生きた歴史
	トメ	○	○	◎
板津	○	◎	○	○
高木	○	○	×	△

図2. 質的差異を導入した各要素の共有の有無による類型化

この図2を見ると、次の三つが興味深い点として浮上してくる。

- ① トメは「生きた歴史」において特攻隊員と深い共有が見られるが、そのシンボル強度はもつとも高い。
- ② 板津は、過去において特攻隊員と深い「空間」の共有があつたにも係わらず、トメよりもシンボル強度は低い。
- ③ 高木は、現在において「空間」の共有がなく、また「生きた歴史」の共有も浅い。そのシンボル強度はもつとも低い。

アルヴアックスは、「歴史」を相対的に低くみたが、トメの事例を見る限りにおいては、「生きた歴史」は重要度を増している。これはメディアの媒介性が高まった現代特有の現象である可能性もあるだろう。

(三)「知覧」の相対化／比較

『知覧』の各章は、知覧同様に鹿児島県内にあった鹿屋や万世における特攻の記憶や、知覧と関係のあった朝鮮における「知覧」、あるいはマンガなどのコンテンツにおける特攻の表象なども採り上げている。それらから「知覧」を逆照射するなど、「知覧」の相対化を図っている。単純にいえば、第一部の四つの章で、知覧を直接的に掘り下げ、第二部と第三部の計六つの章で広く論考し「知覧」の相対化を図っている。

福間らの「知覧」研究は今後も継続されると思うが、「知覧」の相対化をさらに追求するために、「鹿屋」と「万世」を掘り下げてもらいたい。

『知覧』の第二部のタイトルは、「複数の「知覧」」となっているが、「複数」と捉えるのではなく、あくまで鹿屋における特攻の記憶「鹿屋」、あるいは万世における特攻の記憶「万世」とすべきだろう。それぞれ一章ずつ割かれているが、もつと字数が必要である

と思われる。

さらにいえば、比較は完全に別の章で行った方がいいかもしれない。つまりは、「知覧」「鹿屋」「万世」それぞれの記憶の構築過程を独立して詳らかにした後、別稿においてメタレベルで比較・分析するのである。そうすることではじめて、「知覧」の特殊性と普遍性が明らかになるのではないだろうか。

以上、三つの観点から批判を加えたが、福間らの「知覧」研究は様々な可能性に対して開かれていると思われる。今後に期待したい。

-
- (1) 福間良明『「聖戦」の残像―知とメディアの歴史社会学』人文書院二〇一五年、四三三頁。
 - (2) 福間による比較メディア論の説明は、『聖戦』一七―三〇頁。
 - (3) 同前 一七―三〇頁。
 - (4) 同前 一八頁。
 - (5) 同前 二〇―二二頁。
 - (6) 福間良明『戦跡』の戦後史 せめぎあう遺構とモニュメント』岩波書店、二〇一五年、一一―一二頁。
 - (7) 同前 一〇頁。

- (8) 同前 九二頁。
 (9) 同前 一〇一—一〇二頁。
 (10) 同前 一〇六頁。
 (11) 同前 一〇六頁。
 (12) 同前 一二二—一二五頁。
 (13) 同前 一二五—一二七頁。
 (14) 同前 一二九頁。
 (15) 同前 一二七頁。
 (16) 同前 一二〇頁。
 (17) 同前 一二〇頁。
 (18) 同前 一二七頁。
 (19) 同前 一三八—三三九頁。
 (20) 同前 二四六頁。
 (21) 同前 二五十一—二五四頁。
 (22) 山本昭宏「金和の象徴」になった特攻——一九八〇年代の知覧町における観光と平和」福間良明・山口誠編『「知覧」の誕生 特攻の記憶はいかに創られてきたのか』柏書房 二〇一五年、九四頁。
 (23) 福間良明「特攻戦跡の発明——知覧航空基地跡と護国神社の相剋」同前 四九頁。
 (24) 高井昌史「特攻の母」の発見 島濱トメをめぐる「真正性」の構築」同前 一〇二頁。
 (25) 福間良明「特攻戦跡の発明——知覧航空基地跡と護国神社の相剋」同前 五七頁。
 (26) 山口誠「知覧」の真正性——「ホテル」化する特攻と「わかりやすい戦跡」同前 一六五—一六六頁。
 (27) 高井昌史「特攻の母」の発見 島濱トメをめぐる「真正性」の構築」同前 一二—一四頁など。

- (28) 山本昭宏、同前 九七頁。
 (29) 山本昭宏、同前 八五頁など。
 (30) 山口誠、同前 一四八頁など。
 (31) 山口誠、同前 一六五頁。
 (32) 山口誠、同前 一七二—一七四頁。
 (33) 井上義和「記憶の継承から遺志の継承へ——知覧巡礼の活入れ効果に着目して」同前 三七五頁。
 (34) 井上義和「記憶の継承から遺志の継承へ——知覧巡礼の活入れ効果に着目して」同前 三七六—三七八頁。
 (35) 井上義和、同前 三八九—三九〇頁。
 (36) 野上元・小林多寿子編著『歴史と向きあう社会学資料・表象・経験』ミネルヴァ書房 二〇一五年、四頁。
 (37) 同前 四一五頁。
 (38) 同前 五頁。
 (39) モーリス・アルヴァックス『集合的記憶』行路社、一九八九年、五八頁。
 (40) 同前 九七頁。ただし「時間」については、フェルナン・ブローデルらの議論を別途参照する必要があるだろう。
 (41) 同前 一八二頁。前項同様、「空間」については、アライダ・アスマンらの議論も参照する必要がある。
 (42) 同前 一八二頁。
 (43) 同前 九七—九八頁。
 (44) 同前 五八頁。
 (45) 同前 八五頁。
 (46) 同前 五九頁。
 (47) 同前 六六頁。